

モンゴル人に対する日本語教育の研究

— モンゴル人学生の誤用例を中心に —

小 林 幸 江

小論は日本語教育の母語別研究の一つの試みとして、モンゴル人の日本語学習者の誤用例から、彼らの日本語学習上の困難点を探り出し、日本語と学習者の母語であるモンゴル語の特質の相違を明らかにすることを目的とする。

I はじめに

<母語別研究の意義について>

「外国語学習に王道なし」とは昔からよく言われることである。加えて外国語学習の際には子どもが長年かかって修得したものを学習者は短時間のうちに能率よく実現することを求められる。学習者が言語形成期を経てきた者であれば母語の干渉、その他多くの困難が予想されよう。しかしもし学習者が外国語を学習する時大きな推進力となるMotivationをもっていれば「王道」とまでいなくても、それなりの方法によって成果を上げることはできよう。その方法であるが、その言語の話されている場の有無、体系的な教授の有無によって次の三つが考えられる。

1. a. 環境、場に依存する方法

その言語の話されている環境、場に入って自ら身をもって言語環境を体験する方法。「習うより慣れろ」を地でいく方法である。これは教育といえるものではなく、教授法の関与する余地はないが、あるレベルの言語を身につけることはできよう。といっても実際問題としてこの方法はだれにでもできるというものではないし、また体得しうることばにも片寄りがある。

2. b. 体系的な外国語教育に依存する方法

学習者が自国にあって学校などで外国語を学習する場合の方法。特殊な場合を除いて教室における学習者の使用言語は均一であるから、この場合には母語別研究の成果が大いに活かされよう。すなわち学習者の使用言語と教授される外国語、それぞれの特質を明らかにすることによってより効果的な教授の為されることが

期待される。

3. a + b

その言語の話される環境にあって、しかも体系的な外国語教育を受ける場合の方法。本校などはこの例である。この場合 b 同様、大いに教授法が関与するわけであるが、b とは内容が少々異なる。つまりこの場合、普通使用語の異なる複数の（多国籍の）学生を対象とするわけで「万能教授法」とでもいうべきものを目ざすことになる。

それではこの場合、母語別研究は不要かと言えば決してそうではない。本校を例にとるならば日本語学習の際、直訳法によらず直接法によって日本語を日本語としてとらえる訓練を積んでいるとはいえ、すでに自国語による言語形成期を経てきた学生たちであるから母語の干渉は少なくないものと思われる。教師が学生の母語を知らなくても、ある程度は教授法は成り立つが、相対的な問題で、もし学生の母語について知識があれば、教授に際して efficiency は大きいものと思われる。たとえば日本語については言うまでもなく、学生の母語をよく理解したうえで、適切なヒント、例文を与えることは教室での作業をスムーズにすることになるし、学生の母語に存在しないような観念を教える場合にもより効果的な教授法をもって臨むことができるわけである。

ここでいう「万能教授法」もつまりは個々の母語別研究に基づくものということになる。常に日本語との比較において為される母語別研究は日本語自体の問題の手がかりを与えると同時に日本語教授法を発展させる一因ともなるわけである。

〈誤用例を扱うにあたって〉

小論はモンゴル人学習者の誤用例を資料として用いているが、ひと口に誤用といってもその原因はいろいろ考えられる。

1. 単なるケアレスミスによる誤用
2. 母語の干渉による誤用
3. 日本語自体の分析が不十分であったり、技術的に未熟であったりするなど教える側の原因により生じる誤用

その他、表面的には誤用と考えられない誤用もある。このように誤用例の原因は複雑多岐にわたり、誤用例研究に際してはこの点を十分考慮しなければならぬ。小論でもインフォーマント、資料ともに限られているため、単なるこじつけにならないよう、資料の取り扱いにはじゅうぶん注意を払ったつもりである。

<インフォーマント，資料について>

小論では1980年4月来日，以来日本語学校で日本語を学んでいるモンゴル人学生 Рэнцэндоо Жигжид，Пантий Ганхуяг 両君の作文，練習張，宿題などに見られる誤用例から資料を採集した。正確に言えば四月から七月までの三カ月間の誤用例からとったものである。本校のレベル分けで言えば「日本語Ⅰ」が終わった段階，すなわち小論の副題も「初級日本語に見られるモンゴル人学生の誤用例を中心に」というのが正しい。

小論では両君に対する質問形式によっても多くの資料を採集した。因みに両君の略歴は次のとおりである。

	出生年	出生地	使用言語
Р. Жигжид	1959年	ウランバートル	ハルハモンゴル語
Ц. Ганхуяг	同	サインジャンダー	同

<モンゴル語について>

ここでモンゴル語に馴染みの薄い読者のためにモンゴル語とはどんなことばか簡単に触れておく。

モンゴル語はアルタイ語族に属する言語で，従来の言語の形態的分類上からはいわゆる「膠着語」に属する。すなわち名詞の曲用や動詞の活用の際に語幹そのものは変化することはなく，一定の語尾を語幹につけて変化させるものである。モンゴル語の名詞には七つの格変化がある。この七つの格変化をНОМ(本)について見てみると次のようになる。(なお，語尾はその代表形を示す。)

1. 主格(～は) ϕ Миний ном___ хаана байна вэ?
<私の本はどこにありますか>
2. 属格(～の) ～ын Номын тавиур дээр үзэг байна.
<本のたなの上にペンがあります>
3. 与位格(～に, で)～д Номонд, сурах юм их бий.
<本で学ぶことはたくさんある>
4. 対格(～を) ～г Тэр номыг аваад өгөөч.
<その本をとってください>
5. 奪格(～から)～аас Тэр номноос уншсан.
<その本から習った>

6. 造格(～で) ～аар Тэр номоор хичээллэнэ.

<その本で勉強する>

7. 共同格(～と)～тай Номтой хамт бас дэвтрээ мартсан.

<本といっしょにノートもわすれた>

こうして作られる文の要素が文を成す時、モンゴル語は日本語と同じくSOV型を示し、また修飾語は被修飾語の前に来る。

このように文法的にも構文的にも日モ両語は「酷似」している。日本語アルタイ語系統説が生まれる由縁であり、また来日三か月にして「日本語の文法はやさしいです」と学生に言わしめる由縁でもある。事実、上に述べたことの他にも語彙の用法に関して日モ両語には類似例が多い。

эм уух, вр жимс болох, халуун усанд орох
<薬を飲む><実 がる><お湯 に入る>

Би хвртэл уйтгартай болно
<私 まで 悲しく なる>

もちろんこうした例がすべてモンゴル人が日本語をたやすく、完全にマスターできるということを意味してはいない。漢字など表記の問題、「は、が」に代表される文法上の問題、語彙の問題など他の学生同様、彼らにも大きな問題となっているのは事実である。異なる文化背景をもつ両語には類似点以上に相違点も多い。しかしそうしたことも類似点が多く、またそれが酷似しているという事実から時に見落とされがちである。類似する言語を学ぶ学習者にとって大きな落とし穴といえよう。

II 誤用例に見る日本語とモンゴル語の相違点

<誤用例>

まずここで誤用例をいくつか紹介してみよう。文は学生の書いたものをそのまま示す。モンゴル語の対訳は現在、モンゴルで使われているキリル文字で表記する。見出しの右が誤用、矢印の向かう左が正しい用法を示す。()内はその際のモンゴル語表記を示す。なお資料数に制限があり、今回は助詞の誤用例に対象を限定する。

(1) 「は」と書くべきところに他の助詞を用いたもの。

<p>1. は←が(φ) (正)←(誤)</p>	<p>(昨日どんなことをしましたか)という問に対して 1. 私<u>が</u>きのう映画を見ました。 < Би <u>өчигдөр</u> кино <u>взсэн.</u> > □ あの大きい自動車<u>が</u>だれのですか。 < Тэр том машин <u>хэнийх</u> <u>вэ?</u> ></p>
<p>2. は←φ(φ) (正)←(誤)</p>	<p>1. 私 <u>日本語</u> 学校の <u>寮</u> に <u>います</u> < Би <u>япон хэлний сургуулийн оюутны байранд</u> <u>байдаг.</u> > □ あなたのいる <u>ところ</u> <u>どこ</u>ですか。 < Таны <u>байгаа газар</u> <u>хаана</u> <u>вэ?</u> ></p>
<p>3. は←に(-д)</p>	<p>1. その日曜日<u>に</u>空が晴れていました。 < Тэр <u>нямгаригт</u> <u>тэнгэр цэлмэг</u> <u>байсан.</u> > □ 東京<u>に</u>もう暑くなりました。 < Токиод <u>халуун болчихсон.</u> ></p>
<p>4. は←を(-г)</p>	<p>1. 私のへやの右 <u>が</u>わに <u>は</u>っている < Миний өрөөний <u>баруун хананд наалттай</u> <u>байгаа</u> <u>漢字の表</u> <u>を</u> <u>先ばい</u> <u>から</u> <u>もら</u>いました。 <u>ханзны хүснэгтийг</u> <u>ахлах</u> <u>оюутнаас</u> <u>авсан юм.</u> ></p>

(2) 「が」と書くべきところに他の助詞を用いたもの。

<p>1. が←は(φ) (-г)</p>	<p>1. 自分の国のかしゅではアダラッスレンというかしゅ < Өөрийн орны дуучдаас, Адарсүрэн гэдэг дуучны утацта <u>歌</u> <u>を</u> <u>聞くの</u> <u>は</u> <u>好き</u>です。 <u>дуулсан</u> <u>дууг</u> <u>сонсох</u> <u>дуртай.</u> > □ 私<u>は</u>ここに <u>来る</u>ため<u>に</u>, <u>国</u>から行く時 <u>飛行</u> < <u>Намайг</u> <u>энд</u> <u>ирэхээр</u>, <u>нутгаас</u> <u>явах</u> <u>вед онгоцны</u> <u>場</u> <u>に</u> <u>父</u>, <u>母</u>, <u>弟</u>, <u>友だち</u> <u>など</u> <u>буудал</u> <u>дээр</u> <u>аав</u>, <u>ээж</u> <u>дvv</u>, <u>найзнөхөд</u> <u>зэрэг</u> <u>たくさん</u> <u>人</u> <u>が</u> <u>い</u>ました。 <u>олон</u> <u>хүмүүс</u> <u>байсан.</u> ></p>
--------------------------------	--

2.が←φ(φ)	1.私は <u>じゆきょう</u> 終わってからたいてい 少し < Би хичээл __ дуусаад, ихэвчлэн жаахан 休みます。 амардаг. >
3.が←を(-г)	1.もう日本語を <u>よく</u> わかります。 < Япон хэлийг сайн ойлгодог. > (япон хэлも可)
4.が←で(-д)	1.ケリーさんは 日本語 <u>で</u> <u>じょうず</u> です。 < Кэрий сан япон хэлэнд сайн. > 口.日本語 <u>で</u> <u>よく</u> 話せるようになる つもりです。 < Япон хэлээр сайн яридаг болох хүсэлтэй. >
5.が←に(-д)	1.私は 日本の音楽 <u>に</u> <u>好き</u> です。 < Би японы дуунд дуртай. >

(3)「を」と書くべきところに他の助詞を用いたもの。

1.を←φ(φ) (正)(誤)	1.私の 学校 は りゅう学生 <u>に</u> < Манай сургууль бол гадаад Оюутнуудад 大 学校 <u>に</u> 入る 前 <u>に</u> 一年間 их сургуульд орохын өмнө нэг жил 日本語__ 教える 学校です。 япон хэл__ заадаг сургууль юм.>
2.を←が(φ)	1.学校 <u>へ</u> は 本や テープレコーダーなど < Сургууль руу ном болон магнитофон зэрэг いろいろな <u>もの</u> が 持って行きます。 янз бүрийн зүйл__ барьж явдаг. >

(4) 零記号を用いるべきところに他の助詞を用いたもの。

1.φ←に(-д) (φ)	1.その時 <u>に</u> 私たちは 日本語, 英語 <u>を</u> < Тэр үед бид нар япон хэл ба англи хэлийг ぜんぜん 知らなかったから <u>むずかし</u> かったです。 огт мэдэхгүй байсан учраас хэцүү байсан.> 口.毎日 <u>に</u> 電車を 降りて バス <u>に</u> 乗りかえています。 < Өдөр бүр__ вагоноос бууж автобусанд сольж суудаг.>
----------------------	--

(5)「で」と書くべきところに他の助詞を用いたもの。

1.で←に(-д)	<p>1.日本<u>に</u>は 富士山 が 一番 高い です。 < Японд бол фүжи уул хамгийн өндөр. > 口へ<u>や</u>に は ごはん を 食べません。 < Өрөөндөө бол хоол идэхгүй. ></p>
-----------	---

(6)「に」と書くべきところに他の助詞を用いたもの。

1.に←で(-д)	<p>1.私たちの学校<u>で</u> 先生が15人, 事務室の人が18人, < Манай сургуульд багш 15, ажилчин 18 , 学生が35人 います。 оюутан 35 байдаг. ></p>
-----------	---

<誤用例に見る日本語とモンゴル語の相違点>

上に示した誤用例から断片的ではあるが、日モ両語の相違点をいくつか指摘できる。

○モンゴル語ではいわゆる主語を表す語に関して日本語に見られるような「は、が」の対立は顕著ではない。誤用例中にもいくつか見られるがモンゴル語でも強調詞< бол >が時に「とりたて」の意味を表すこともあるようであるが、日本語の「とりたて」の機能と同じといえるか否かははっきりしない。(1)(2)(3)

また従属節内の主語は対格< -г >の形によって表され、文の主語から区別されている。(2)1.ロ

○「映画を見る」「日本語を教える」「新聞を読む」などの目的語はモンゴル語ではふつう無格で示される傾向があるようである。(1)(3)(5)(6)(7)

○「好き」「じょうず」などは日本語ではその対象を「が」で表すが、モンゴル語では与位格を用いる。(2)4・5

○場所を表す場合、モンゴル語では動作の行われる場所、存在の場所は区別されず与位格が用いられる。(5)(6)

○時間を表す場合も与位格が用いられるが、日本語における「に」のつく場合、つかない場合と範囲は同じではない。

これらの中には適切な例文、簡単なコメントを与えることによって、また助詞と動詞の組み合わせを強調することによって誤用が防げるものもある。一方、日モ両語に本質的な違いがあり、それが誤用例となって現われるものもある。そう

いうものについてはより詳細な分析が必要となろう。そこで次に小論では誤用例に現われた母語の影響を具体的にみるために、今回特に誤用の目立った与位格〈-д〉に関するもののうち〈явах〉(行く) , 〈очих〉(行き着く) , 〈ирэх〉(来る) について用いられる与位格に関する誤用例の分析を試みる。

Ⅲ явах , Очих , ирэх について用いられる与位格に関する誤用例の分析

モンゴル語の与位格は行く、来るなどの移動動詞と結びついて〈到着点〉を表す。

○ Таван цагийн вед бид нар байрандаа харьж ирсэн.
〈 5 時ごろ 私たちは りょうに帰ってきた。〉

○ Би Киото шиг дуу чимээ бага хотод очиж үзмээр байна.
〈私は京都のような 静かな 町に 行ってみたい。〉

○ Энэ өдөр Москвад хврээд, шууд Япон руу нисэх онгоцонд суусан.
〈この日 モスクワに着いて, すぐ 日本へ(行く) 飛行機に 乗った。〉

ところで学生の書いたものの中に次のようなものがあった。

(イ) 4月2日に 日本へ 来ました。
〈4 сарын 2-нд Японд ирсэн.〉

(ロ) 食堂で お茶を 飲みに行きました。
〈Гуанзанд цай уухаар явсан.〉

モンゴル語では方向は後置詞〈руу〉を用いて表す。(イ)は誤用例とは言えないが学生はそのモンゴル語訳に与位格を用いている。これは単なるケアレミスか。それとも現代日本語で「へ」と「に」がほとんど区別されずに使われていると同じような傾向がモンゴル語にもあるのだろうか。

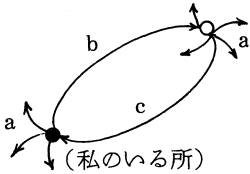
(ロ)もまた「に」または「へ」とすべき間違いとも思われたが、念のためインフォーマントにあたってみたところ、〈гуанзанд явна〉は〈гуанзанд ирнэ〉に対して「食堂に行く」「食堂に来る」に見られるような対立を示すものではないという。〈тэнд оч!〉(そこに行け!) , 〈тэнд ир!〉(そこに来い!) とは言えても、явахを使って同じような意味で〈тэнд яв!〉とは言えないという。どうも(ロ)の与位格は〈到着点〉を表しているのではなさそうだ。では何

を表しているのか。それを見る前にここで〈явах〉について少し検討してみよう。〈явах〉は移動動詞といっても上に示したものと種類が違うのではないだろうか。

モンゴル語の〈явах〉, 〈очих〉と〈ирэх〉はほぼ日本語の「行く」と「来る」に相当する。しかし次の文では日本語と使い方が少々異なっている。

私がここに 来るために, 国から 行く 時に 飛行場 に
 <Намайг энд ирэхээр, нутгаас явах вед онгоцны буудал дээр
 父, 母 弟, 友だち など たくさんの 人 が いました。
 аав, ээж дүү, найз нөхөд зэрэг олон хүмүүс байсан.>

この場合, 日本語なら「来る」と言うべきところである。インフォーマントに



よればこの場合, ирэхはぜったいにだめだが гарах (出る)なら置き代え可能という。そこで考えられるのが, 次の〈явах〉, 〈очих〉, 〈ирэх〉の関係図である。

a ; явах (гарах) b ; очих c ; ирэх

つまり〈явах〉は〈очих〉や〈ирэх〉のようにその向かう線がある点に達するか否かは問題ではなく, そこを出てある方向へ向かうことを本来の意味とするのではなからうか。そしてその方向がはっきりしていれば次のようになる。

1. 自分の今いる方に向かう時 ; — руу ирэх Сургууль руу ирнэ.

〈学校へ来る〉

2. 自分以外のある方に向かう時 ; — руу явах Сургууль руу явна

〈学校へ行く〉

3. その周辺に向かう時 ; — (属格) хавь руу явах

Сургуулийн ойр хавь руу явна 〈学校の付近へ行く〉

そこでたとえば方向性の意味をもつ〈тийшээ〉(そちらへ), 〈дээшээ〉(上へ)などと共に〈тийшээ яв !〉〈дээшээ яв !〉とは言えても方向性の意味を表さない тэнд (そこ) と共に〈тэнд яв !〉とは言えないわけである。このことはすなわち与位格が方向性を示すものではないことを意味するものである。その他, нисэх (飛ぶ) зөөх, шилжүүлэх (運ぶ)なども явах 同様, 与位格と結びついて〈到着点〉を表すことはない。言い換えればモンゴル語では「移動+到着」という意義素をもつ移動動詞, たとえば очих, ирэх, харих (戻る), хврэх (着く)などと結びついた時, 与位格は〈到着点〉を示すのである。そこ

で(イ)は「4月2日に日本に来ました。」とするのが、学生が意図したモンゴル語の訳としては正確ということになる。

ところで(ロ)は<到着点>を表すのでも<方向>を表すのでもなければ、いったいどのように訂正すべきであろうか。ここで<явах>と名詞の結びつき方を具体的に見てみよう。

		руу	-д(-т)	
Би	1. дэлгүүр (店) эмнэлэг (病院) сургууль (学校)	+	+	явна
	2. эмч (医者)	+	+	
	3. Япон (日本), зочид буудал (ホテル) ○○ комбинат (○○コンビナート) ○○ үйлдвэр (○○工場) ………	+	+	

1. 学校, 病院, 店, 映画館などに<руу>がつけば, 単にその場所へ向かうことを意味するが, 与位格を用いると, それぞれ

○ Эмнэлэгт үзүүлэхээр явна.

< 病院で みてもらうために 行く。 >

○ Дэлгүүрт юм худалдаж авахаар явна.

< 店で ものをかうために 行く。 >

○ Сургуульд хичээл хийхээр явна.

< 学校で 勉強 を するために 行く。 >

というように与位格によって示される場所で何かをするために今いるところを出ていく場合に用いられる。その目的がその社会で一般的であれば, 目的を表す部分は省略され, 日本語ではそれぞれ「通院する, 治療する」「買物に行く」「通学する」などと実質的な意味に訳せるわけである。

2. 与位格の前に人が来ても同様で, その人によって表される場所で何かをするために今いるところを出ていくの意味になる。<эмчид явна>は医者のところすなわち病院になり, その目的は一般的であるため省略されるわけである。

3. 一方、その目的が一回的、個人的な場合、それを示さなければわかりにくいこともある。〈зочид буудалд явна〉だけではわかりにくく、語を補わなければならぬ。

Би зүчид буудалд Доржтой уулзахаар, явна.
〈私は ホテルで ドルジと会うために 行く。〉

つまり〈—д явах〉のパターンは常に成立するわけではない。やゝ慣用的な用法と言えないこともない。これが更に慣用化したものに次のような言い方がある。〈кинонд явна〉〈маханд явна〉〈жимсэнд явна〉 киноは映画、махは肉、жимсは果物で、それぞれ「映画に行く」「肉屋へ行く」「果物屋へ行く」となる。これもすべてについては言えないようだ。

ここで(ロ)にかえてその与位格の用法をもう一度見てみると、すなわちこれは上に述べたように「お茶を飲む」という動作の行われる場所を示すものである。(ロ)は「食堂でお茶を飲むために(今いるところを出て)行った」とでもするのが正しいだろう。

学生の誤用例中には次のようなものもあった。

(ハ) 電車で 乗りながら、新聞を 読む。

〈Галт тэргэнд явангаа, сонин уншина.〉

〈галт тэргэнд явах〉の与位格に対する訳は一見手段を表しているようであるが実際はどうだろうか。この文を〈яхвах〉の代わりに〈очих〉を用いて〈галт тэргэнд очно〉としたらどうか。もしこの与位格が手段を表すのであれば、〈яхвах〉が〈移動+到着〉の意義素をもつочих に入れ代わってもいいわけである。しかし実際には〈очих〉を使うと「電車のあるところに行き着く」という意味になるとのこと。つまりこのことは与位格が手段を表してはいないということになる。モンゴル語では手段は造格〈—аар〉によって表される。上の文も何か省略された形であろう。この場合、考えられるのが〈галт тэргэнд суух〉(電車に乗る)という句である。この〈суух〉には「坐る」「住む」などの意味があり、この場合も〈галт тэрэг〉は〈суух〉という動作の行われる場所と考えられる。つまり(ハ)は

Галт тэргэнд сууж явах ведээ сонин уншина.
〈電車 で 坐って 行っている時、新聞 を 読む。〉

がもともとの文で、〈суух〉が落ちて慣用的に〈галт тэргэнд явах〉にな

ったのだろう。因みに上の文に対する質問文は

Та хаана сонин унших вэ ?

〈あなたは どこで 新聞を 読みます か。〉

とのこと。〈галт тэрэг〉が場所を表していることがわかる。

ここで〈явах〉とはちよっと離れるが、次のような誤用例も上の説明で解釈できそうだ。

(ニ) Энэ радионд манай улсын нэвтрүүлэг сонсогддоггүй.

〈この ラジオで 私たちの 国の ほうそう は 聞かれません。〉

(ホ) Дуранд фчжи уул сайхан харагддаг.

〈ほう遠きょうで 富士 山 が きれいに 見えます。〉

与位格が手段を表しているかのようにあるが、やはりこの場合も場所とするのが正しいだろう。それは次の理由による。

Хашаанд машин байна.

〈柵に (=柵の中に)自動車 がある。〉

という例文からもわかるようにモンゴル語の与位格には「～の中に」という意義素が含まれている。そこで〈явах〉と結びつけば、上に述べた以外に、その中をあちこち行く意を表すことになる。たとえば〈ДеPART-д явна〉と言えば「デPARTで買いのをするために今いるところを出ていく」という意味、そして「デPARTの中であちこち行く」という二つの意味を表す。(ニ)(ホ)で与位格によって表される場所は非常に閉じられた限定された空間を示しているが、これもその空間の中で放送が聞かれる、富士山が見えるという状態が生じるわけである。もっともこの場合、日本語ではこのような言い方はせず、「ラジオ」「望遠鏡」を手段として考え、「ラジオで」「望遠鏡で」とするのが適当であろう。

(ヘ) 旅行に行く

〈Аялалд явна.〉

上の日本語は誤用例ではないが、そのモンゴル語訳がやはり〈与位格+явах〉となっているのでとりあげた。上の文で与位格は目的を表しているようだが、実際はどうだろうか。目的はモンゴル語では造格(—аар)によって表される。

Кювшюв рvv аялалаар явна(очно).

〈九州 へ 旅行するために 行く 〉

この場合、〈явах〉〈очих〉ともに成立する。次に(ヘ)の〈явна〉を

〈очно〉に代えて〈аялал очно〉としてみる。この場合もインフォーマントによれば成立しないとのことであった。すなわちモンゴル語の与位格は目的を表さない。それが証拠に上の文はどんな名詞でも成り立つというわけではない。

〈ажил〉「仕事」という語に与位格を用いて〈ажилд явна〉といえば「勤め先、また仕事をする所で仕事をするために行く」ことであり、また〈аялал〉「旅行」に与位格が用いられれば「旅行先で見物したりするために行く」となる。つまりこれらはそれぞれの名詞によって示される場所がはっきりしたイメージをもっていて、そこで為される目的が一般的であるため成立するのである。しかしたとえば〈судлал〉「研究」に用位格を用いて〈судлалд явна〉とはならないとのこと。〈судлал〉によって示される場所がはっきりしたイメージをもたないためである。この場合には〈судлагаа хийхээр явна〉（研究をするために行く）とするのが正しいとのこと。

以上、〈与位格 + явах〉の誤用例を中心に見てきた。実は(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)などは当初はそれぞれ〈到着点〉〈手段〉に訂正し、済ませていたものである。ところがある日、「京都に行って友だちと会った。」に対するモンゴル語訳を学生に示したところ訂正された。筆者は〈京都 д явах〉と与位格を使ったのだった。それで〈—д явах〉、「～に行く」とは異なるということに気づき、改めて誤用例を見直したところ、ここに示したような例が出てきた次第である。まだ語彙の少ない一学期に学生たちは実はモンゴル語を忠実に訳していたわけである。モンゴル語の与位格は日本語の「に」か「で」に訳せる。学生たちは当初混乱しながらいずれかに訳していたのである。しかし日本語の「に」「で」の表す意味範囲はモンゴル語の与位格より広い。そこで「に」か「で」に訳せば表面的にはそのまま通じてしまうことが多い。たとえば〈дуранд фvжи уул сайхан харагдлаг〉を学生がもし「望遠鏡で富士山がきれいに見えます。」とした時、日本語だけ見れば訂正するところはひとつもない。しかし彼らが意図したモンゴル語文の意味とは少々異なることになる。(p 36) 通じればそれでいいのかもしれない。しかしそれでは正しく理解したことはならない。そのへんのチェックはむずかしいところだが、そういう点を積極的にとり上げ、明らかにしていくことが母語別研究に課せられた課題の一つであろう。

Ⅳ おわりに

今年度、本校ではモンゴルから初めて学生を受け入れた。小論はその担任として何か報告しなければいけないという使命感と、また筆者自身、大学での専攻がモンゴル語であったので当初から彼らの誤用例には関心があったということから思い立ったものである。今小論を終わるにあたって、すでに周知の事実を記しただけかも知れないという一抹の不安を覚える。またインフォーマント、資料数ともに限られ、内容はかなり曲解しているかもしれない。今回は一つの報告として読んでいただければ幸いである。

最後に小論の資料提供者であり、またいろいろ貴重な情報を与えてくれた二人の学生にここで感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- | | | |
|---------------|-------------------------------|------------------------|
| 小沢 重男 | 『モンゴール語四週間』 | (大学書林) |
| John G Hangin | “ Basic Course in Mongolian ” | (Indiana Univ. Pub.) |
| | 『言語生活』 | (筑摩書房) |
| | 『言語教育学叢書』 | (文化評論出版) |

A Study of Teaching Japanese to Mongolian Students

—Based on Errors Made by Mongolian Students—

KOBAYASHI Yukie

The aim of this paper is to show the problems Mongolian Students experience whilst studying Japanese and to make clear the differences between Japanese and Mongolian languages by analysing the errors made by Mongolian students in their Japanese studies.